

ヴァレリー・ラルボーとジェイムズ・ジョイス ——『ユリシーズ』の仏語訳をめぐる——

西村 靖敬

はじめに

20 世紀前半に活躍したフランスの詩人・作家ヴァレリー・ラルボー Valery Larbaud (1881-1957) は、その並外れた語学力を武器に、該博な文学的教養と知識に基づいて、多数の翻訳や評論を著し、「文学の仲介者」の役割を遺憾なく果たした。彼が最も早い時期に「発見」し、関わったのは、新興国アメリカ合衆国の詩人ウォルト・ホイットマン Walt Whitman (1819-92) であったが¹、彼の国際文学史上最大の功績は、何と云っても、アイルランドのジェイムズ・ジョイス James Joyce (1882-1941) とその『ユリシーズ』 *Ulysses* (1922) の価値を全世界に向けて発信したことであった²。

本稿では、ラルボーがジョイスの『ユリシーズ』の仏語訳にどのように関わったのかについて明らかにし、ラルボーの『ユリシーズ』訳の特徴等について検討してみたい。

1. ラルボーとジョイスの出会いと交流

ラルボーとジョイスがパリで出会う事情については、拙著『1920 年代パリの文学——「中心」と「周縁」のダイナミズム』（多賀出版、2001 年）のⅡ「ジェイムズ・ジョイス——『周縁』からのエグザイル」において詳述したことがあるので、詳細はそちらに譲りたいが、ここでは主要な経緯についてのみ簡単に触れておきたい。

まずはジョイスの側から見ていくと、彼が祖国アイルランドで生活するのは、生まれてからの 20 年余りに過ぎない。酒飲み、かつ浪費家で、無能なために収税吏の職を失い、やけ酒を飲み暮らしてすべての財産を費消し尽くし、一家を貧窮のどん底に突き落とした

¹ ラルボーはまだ十代の 1899 年から 1901 年にかけての時期に、ホイットマンを「発見」し、アンドレ・ジッド André Gide (1869-1951) のイニシアティブで 1918 年に刊行された『ウォルト・ホイットマン選集』 *Walt Whitman: Œuvres choisies, Poèmes et Proses* の巻頭に長文の「ホイットマン研究」を序文として発表するとともに、詩集『草の葉』 *Leaves of Grass* (1855) 等から数編の作品を翻訳して収載している。詳しくは、拙稿「ヴァレリー・ラルボーのウォルト・ホイットマン受容——批評と翻訳を通して——」（千葉大学文学部『人文研究』第 42 号、2013 年 3 月）を参照されたい。

² 詳しくは、拙著『1920 年代パリの文学——「中心」と「周縁」のダイナミズム』（多賀出版、2001 年）のⅡ「ジェイムズ・ジョイス——『周縁』からのエグザイル」を参照されたい。

父親への嫌悪、イエズス会系の学校の教師＝聖職者との摩擦³、そしてイギリスからの独立を求める運動——ジョイスはこれを心情的には支持していた——の圧殺に対する絶望など、こうした要因が重なって、ジョイスは1904年10月、アイルランドを去っていくのである。それ以降は、主として自作の出版契約のことで三度ほど短期で帰国することはあるものの、祖国で暮らすことはなかった。

アイルランドを脱出したジョイスが最初に向かったのは、スイスのチューリッヒであった。そこで英語教師の職を見つけようと考えたからだが、チューリッヒではそれが叶わず、現クロアチア領のプーラを経て、翌年（1905年）3月にトリエステの語学学校に就職することができた。この地にジョイスはその後15年余り滞在し、自作の執筆に励むことになるが、1913年12月には、エズラ・パウンド Ezra Pound (1885-1939)——アメリカ生まれだが、ジョイスと同様に祖国を去って、ヨーロッパに渡ってきていた——との交遊が始まる。そして、パウンドの斡旋により、「若い芸術家の肖像」“A Portrait of the Artist as a Young Man” や「ユリシーズ」の雑誌への掲載が実現する。そして1920年6月、スイスで初めてパウンドに会う機会を得た際に、アイルランドへの一時帰国を考えていたジョイスは、パウンドからパリで数日過ごそうと持ちかけられるのである。このパウンドからの誘いかけが、その後のジョイスの半生を決定してしまったと言っても過言ではない。「数日」どころか、同年7月から死の前年まで、実に20年間にわたってパリに居続けることになるからである。

一方、ラルポーの方は、ジョイスがパリにやって来た1920年頃には、中編小説『フェルミナ・マルケス』*Fermina Márquez* (1911)、短編小説と詩と日記体テキストから成る『A. O. バルナブース全集』*A. O. Barnabooth, Ses Œuvres complètes* (1913)、短編集『幼なごころ』*Enfantines* (1918)などによって詩人・作家として、さらには、前述の通り、ホイットマンなどに関する仕事によって、翻訳家や批評家としても一定の評価と地位を得ていた。

このようなラルポーと、遠く祖国アイルランドを離れて長年生活を続けてきたジョイスとが出会い、交流を深めていく橋渡しの役割を果たしたのは、パリのオデオン通りに1919年から英米書の書店「シェイクスピア・アンド・カンパニー」を開設していたアメリカ人

³ ジョイスは、後に結婚相手となるノラに宛てて、1904年8月29日に次のように書き送っている。「6年前、ぼくは激しい憎しみをもってカトリック教会を離れました。ぼくの性質がつき動かすもののゆえにそこに留まることが不可能と知ったからです。学生の頃、ぼくは教会に戦いを挑み、提供された地位を拒絶しました。そうすることで乞食となりましたが、誇りは保ちました。今ぼくは、書き、しゃべり、行うことによって公然と戦います」（リチャード・エルマン『ジェイムズ・ジョイス伝 1』、みすず書房、1996年、194頁）。

女性シルヴィア・ビーチ Sylvia Beach (1887-1962)であった。雑誌に掲載されていた「若い芸術家の肖像」や「ユリシーズ」を読んだ彼女は、ジョイスのファンになっていたのだが、1920年7月初め、フランスの詩人アンドレ・スピール André Spire (1868-1966)宅で催されたパーティーにおいて、パリに到着してまだ日の浅いジョイスその人と対面するのである。他方、ラルボーはビーチの書店の顧客の一人であった。かくして、「ジョイスとラルボーは確かに知りあうべきだ⁴」と考えたビーチは、同年のクリスマス・イブの日、二人を自分の書店で引き合わせるのである。

こうして、ラルボーとジョイスの公私にわたる親交が開始される。私的な面では、ラルボーは長期にわたって不在の時には、ジョイスにパリの自宅を住まいとして提供したりもした⁵。ジョイスの方は、書き継いでいた「ユリシーズ」の新たな挿話や原稿ができるたびにラルボーに見せ、二人が知り合った翌年の11月末頃には、ラルボーは余人に先立って、大作「ユリシーズ」の全貌を知り得ていたのである。こうして、同年12月7日、ラルボーのジョイスに関する歴史的な講演が行なわれるに至る。会場となったのは、フランス人女性アドリエヌ・モニエ Adrienne Monnier (1882-1955)が「シェイクスピア・アンド・カンパニー」の筋向かいに開設していた「本の友の家」(La Maison des Amis des Livres)という書店であった⁶。ここでのラルボーの講演の内容の詳細についても、拙著『1920年代パリの文学——「中心」と「周縁」のダイナミズム』に譲りたいが、古代ギリシアのホメロスの叙事詩『オデュッセイア』との照応関係を中心とした、ジョイスの『ユリシーズ』の構造やその象徴性の解明が、その後今日に至るまでの所謂「ジョイス学」の礎石を据えたのである。そして、「この朗読会はジョイスにとってひとつの勝利でした。彼の人生で最大の試練を迎えていた時期に彼にとって大変な贈物でした⁷」とシルヴィア・ビーチが述べるように、ラルボーのこの講演が、翌年2月のビーチによる『ユリシーズ』出版の成功を大きく後押ししたことも疑いないところである。

2. ラルボーと仏語訳『ユリシーズ』

さて、この1921年12月のジョイスに関する文芸講演会では、ラルボーによる講演に加

4 シルヴィア・ビーチ『シェイクスピア・アンド・カンパニー書店』(中山末喜訳)、河出書房新社、1974年、77頁。

5 1921年5月中頃から同年9月末までの期間である。

6 オデオン通りにあった「シェイクスピア・アンド・カンパニー」と「本の友の家」はいわば姉妹店の関係にあり、二人の女性店主も非常に親しい関係にあった。

7 シルヴィア・ビーチ、前掲書、103頁。

えて、『ユリシーズ』の原文テキストの一部の朗読⁸とその仏語訳が披露された。ここで発表された「テレマコス」、「セイレン」と「ペネロペイア」の一節の翻訳はフランスにおける『ユリシーズ』の初訳の榮譽を担うものとなったのだが、ラルボーは講演のみならず、この仏語訳にも多大な貢献をなしている。この点につき、以下に少し触れておきたい。

『ユリシーズ』の仏語訳の話がアドリエヌ・モニエの周辺で持ち上がったのは、かなり早い時期のことだったようだ。彼女は、その頃のことを次のように回想している。

『ユリシーズ』の翻訳は、ほとんどすぐ、1920年から1921年にかけて早くも、ぜひともやらなければならないことと思われた。シルヴィア・ビーチがこの作品について話してくれた後、すぐさま私はそう思ったし、ヴァレリー・ラルボーも作品を読み終えて、ただちにそう考えたのだった。(中略) 私たちの友人で英語が読めない人々も同様だった⁹。

だが、モニエは続けてこう書く。

しかしいったい誰が翻訳するのか？ 運命によって指名された最初の犠牲者は、結局のところヴァレリー・ラルボーだった。ジョイスが彼と知り合い、作家として、翻訳者として、さらに私はこのように付け加えたいのだが、友人としても、彼がすばらしい資質の持ち主であることを認識した時、ジョイスの願いはただひとつだった。すなわち、彼に『ユリシーズ』を翻訳してほしいということである。そもそもこのような仕事ができるのは彼だけだったのだ¹⁰。

このようなモニエの回想によっても、ラルボーが、ジョイスを含め、周囲の友人たちからいかに信頼を寄せられていたかがうかがえるのだが、ラルボーはいったんはモニエからの要請を受諾したものの、結局はそれを引き受けることができなかった。というのも、『ユリシーズ』の翻訳が具体的に日程に上ったのは、ジョイスのための前記文芸講演会の日取りとその内容が決定された1921年10月頃のことであり——ラルボーはその時点では、翻訳に着手していなかった——、それから2か月ほどの短期間に、講演会当日に発表されるべき翻訳を完成させることは、ラルボーの力をもってしても不可能だったからである。

⁸ 朗読者は、ジミー・ライト Jimmy Light というアメリカの若手俳優であった。

⁹ Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon*, Albin Michel, Paris, 1989, p. 153.

¹⁰ *Id.*

当日に行なわれるジョイスに関する講演の準備こそ、彼にとっては何にも増して全精力を傾注すべき事柄だったのだ。

そこで、急遽ラルボーの代役として指名されたのは、ジャック・ブノワ＝メシャン Jacques Benoist-Méchin (1901-83) という、まだ 20 歳そこそこの青年であった¹¹。彼は作曲家志望の学生であったが、前年の 11 月にラルボーが同じモニエ主催の文芸講演会でサミュエル・バトラー Samuel Butler (1835-1902) について講演を行なった際に、このイギリス人作家の作曲した曲のいくつかをピアノで演奏したことがあり、ラルボーとも懇意の仲であった。さらに彼は文学にも興味を有し、英語やドイツ語も堪能であったから、若いながらラルボーの代役にはうってつけの人物であった。

かくしてブノワ＝メシャンに翻訳のバトンは渡され、彼は、ラルボーによって選ばれた『ユリシーズ』の断章の仏語訳に取り掛かった。そして、ジョイスからの要請に基づき、ラルボーの親友でもあったレオン＝ポール・ファルグ Léon-Paul Fargue (1876-1947) もこの作業に加わり、ファルグはとりわけこれらの断章の卑語の翻訳を担当することとなった。

ラルボー自身は直接翻訳に携わる立場ではなくなったが、彼には、友人たちによって遂行されるこの訳業の最終的な監修者の役目が割り当てられたのである。しかし、この監修者の役割が彼に思わぬ難儀をもたらすことになる。訳者たちの作業が遅滞に遅滞を重ね、講演会の 5 日前になっても、ラルボーは、「翻訳が届きません！水曜日〔講演会当日のこと——西村〕に全く間に合いそうもありません¹²」とモニエに向かって嘆かなければならぬ有様で、このラルボーの窮状は実に本番の直前まで続き、監修者として訳稿の修正や推敲を行なわなければならなかったからである。

このようなラルボーの献身的な大奮闘のお陰で、これらの断章の仏語訳は講演会の席で無事披露された。これらの翻訳は当初、ラルボーの講演とともに、翌年（1922 年）の『新フランス評論』*La Nouvelle Revue Française* 4 月号に掲載される予定であったが、ラルボーの講演原稿は掲載されたものの、翻訳——先にも記した通り、フランスにおける『ユリシーズ』の初訳であった——の方は、同誌の編集長ジャック・リヴィエール Jacques Rivière (1886-1925) の判断により、残念ながら掲載には至らなかった so であつた。

¹¹ ジャック・ブノワ＝メシャンは、1920 年代後半以降は主としていくつかの通信社や新聞社などでジャーナリストとして活動するが、第二次大戦期において積極的に対独協力を行なったために、戦後逮捕され、1947 年 6 月に死刑判決を受ける。しかし、翌月には恩赦により懲役刑に減刑される。

¹² Valéry Larbaud, *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach 1919-1933*, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, Paris, 1991, p. 72.

以上が、『ユリシーズ』の最初の仏語訳に対するラルボーの関わりのあらましが、それから2年余り経過した1924年の春、『ユリシーズ』の翻訳に新たな局面が到来する。その頃ラルボーは、ポール・ヴァレリー Paul Valéry (1871-1945) やレオン＝ポール・ファルグとともに編集責任者として、発行人となるモニエらと、新たに創刊される文芸季刊誌『コメルス』 *Commerce* の発刊準備を行っていた。同誌の出資者となってくれたのは、アメリカ生まれのド・バシアノ大公妃 *Princesse de Bassiano* (1880-1963) であったが、この大公妃から、『ユリシーズ』の断章のラルボーによる仏語訳を創刊号にぜひとも掲載してほしいとの要請が彼に対してなされたのである。実はラルボーは2年程前の1922年3月24日に、アドリエヌ・モニエに対し、「翻訳というものから完全に手を引くことにしたからには、『ユリシーズ』の翻訳からも手を引きます¹³」と宣言していたのだが、彼自身や仲間たちの良き理解者であり庇護者でもあった大公妃のたつての願いであってみれば、さすがのラルボーも2年前の「宣言」を撤回せざるを得なくなったのである。そこで彼は「ペネロペイア」の末尾——彼はそれが「内的独白」の最良の例と考えた——の翻訳を引き受けることになり、「テレマコス」と「イタケ」の断章の翻訳は、新たにオーギュスト・モレル *Auguste Morel* (1885-1978) に委ねられた。モレルは、フランシス・トムスン *Francis Thompson* (1859-1907)、ジョン・ダン *John Donne* (1572-1631)、ウィリアム・ブレイク *William Blake* (1757-1827) などのイギリス文学の翻訳者として高い評価を得ていた人物であった。こうしてラルボーとモレルは精力的に翻訳作業を遂行し、彼らの『ユリシーズ』の仏語訳は、1924年8月に発行された『コメルス』創刊号の誌面を飾ったのであった。これが、印刷された仏語訳『ユリシーズ』の第1号である。

3. ラルボーによる『ユリシーズ』の仏語訳

さて、ラルボーが『コメルス』誌創刊号に発表した仏語訳は、上記の通り、『ユリシーズ』の最終章「ペネロペイア」の末尾の部分である。その後半部を以下に引用してみよう。

¹³ *Ibid.*, p. 97. このラルボーの「宣言」について、モニエは次のように理解を示している。「ラルボーのこの断念が唐突に見えるのは表面だけのことである。あらゆることを熟慮した上でのことと私は確信している。彼に翻訳者や……マネージャーになってほしいと願っていた作家の数を考えれば（彼のジョイスへの肩入れが、大いにそうした夢を抱かせたに違いない）、さらに彼が賞賛の念を寄せていた作家の数を考えれば、もし彼が人の言いなりになり、また気の向くままにやったりしたら、休むこともなく、彼自身の作品を全く仕上げることもできず、翻訳と序文に押しつぶされてしまうおそれがあったのだ。彼の讚美者や友人たちは、彼のこうした決意を喜ばずにはいられなかった——誰よりもこの私が！」（*Adrienne Monnier, Rue de l'Odéon, op., cit., p. 177.*）

le jour ou je lai amene a se declarer oui dabord je lui ai donne le morceau de gâteau aux amants que javais mordu cetait une annee bissextile comme maintenant oui il y a seizeans mon Dieu apres ce long baiser javais presque perdu le souffle oui il dit que jetais une fleur de la montagne oui alors nous sommes des fleurs tout le corps dune femme oui pour une fois il a dit vrai et le soleil brille pour vous aujourd'hui oui cest pour ça quil ma plu parce que jai vu quil comprenait ou sentait ce quest une femme et jai compris que je pourrais toujours le mener et je lui ai donne tout le plaisir que jai pu pour lamener a me demander de lui dire oui et je ne voulais pas repondre dabord je regardais seulement vers la mer et vers le ciel je pensais a tant de choses quil ne savait pas sur Mulvey et M. Stanhope et Hester et papa et le vieux capitaine Groves et les marins qui jouaient a chat-perche et saute-mouton et laver la vaisselle comme ils disaient sur la jetee et la sentinelle devant la maison du gouverneur avec la chose autour de son casque blanc pauvre diable a moitie grille et les Espagnoles qui riaient avec leurs chales et avec leurs hauts peignes et les encheres le matin les Grecs les Juifs et les Arabes et le diable sait qui encore de tous les coins de leurope et Duke Street et le marche a la volaille tout caquetant devant Larby Sharons et les pauvres anes qui trebuchaient a moitie endormis et ces gaillards vagues en manteaux qui dormaient dans lombre sur les marches et les grandes roues de chars de taureaux et le vieux chateau qui a des milliers dannees oui et ces beaux Arabes tout en blanc et en turban comme des rois qui vous prient dasseyez vous place dans leur petit bout de choppe¹⁴

次に、これに対応する原文および邦訳を引いておく。

the day I got him to propose to me yes first I gave him the bit of seedcake out of my mouth and it was leapyear like now yes 16 years ago my God after that long kiss I near lost my breath yes he said I was a flower of the mountain yes so we are flowers all a womans body yes that was one true thing he said in his life and the sun shines for you today yes that was why I liked him because I saw he understood or felt what a woman is and I knew I could always get round him and I gave him

¹⁴ «Ulysse(fragments)», *Commerce*, Cahier I, été 1924, pp. 156-157.

all the pleasure I could leading him on till he asked me to say yes and I wouldnt answer first only looked out over the sea and the sky I was thinking of so many things he didnt know of Mulvey and Mr Stanhope and Hester and father and old captain Groves and the sailors playing all birds fly and I say stoop and washing up dishes they called it on the pier and the sentry in front of the governors house with the thing round his white helmet poor devil half roasted and the Spanish girls laughing in their shawls and their tall combs and the auctions in the morning the Greeks and the jews and the Arabs and the devil knows who else from all the ends of Europe and Duke street and the fowl market all clucking outside Larby Sharons and the poor donkeys slipping half asleep and the vague fellows in the cloaks asleep in the shade on the steps and the bigs wheels of the carts of the bulls and the old castle thousands of years old yes and those handsome Moors all in white and turbans like kings asking you to sit down in their little bit of a shop¹⁵

あの日あたしは彼に結婚をもうしこませた y e s 最しよシードケーキを口うつしで彼に食べさせてあれはうるう年のこと今年とおなじ y e s 16 年前あああのながいキスのあとであたしは息がとまりそう y e s あたしは山にさく花のようだと彼は言った y e s そうあたしたちは花あらゆる女の体は y e s あれは彼がいままで言ったたったひとつの本とうのことそして太陽はあなたのためかがやいているきょうも y e s だからあたし彼が好きだってあたしにはわかった女とはどういうものなのか彼にはわかっていることが感じ取っていることがそしてあたしにはわかったいつだって彼をあやつれるということだからあたしはできるかぎりのあらゆるよろこびを彼に味あわせて彼を誘わくしてとうとう彼はあたしに y e s と言ってくれとそしてあたしははじめは答えようとしないでただむこうをながめて海や空のほうそれからそうあたしは考えていたとてもいろいろのこと彼の知らないことマルヴィのことそれからミスタスタナップそしてヘスターそしてお父さんそして年よりのグローヴズ大尉それからすい兵たちのことさん橋で鳥まねとか降さんとか皿あらいとか言ってるあそびをしてたっけそれから総とくかん邸の前の歩しょうの兵たい白いヘルメットのまわりに布きれをつけてかわいそうねまるでお日さまのねつでやかれてるみたいそれからスペイン娘たちショールをかけて大きなくしをさして笑ってそれから朝のせりいちギリシア人とユダヤ人とアラビア人とそれから誰にもなんだかわからないとにかくヨーロッパのすみずみから来

¹⁵ James Joyce, *Ulysses*, Shakespeare and Company, Paris, 1926, pp. 734-735.

たあやしげな人びとそしてデュークどおりそしてラービーシャロンの店の近くの鳥いちばではあらゆる鳥どもがこっここつとよんでそしてかわいそうなロバい眠りして足をすべらしてそれからマントをはおって石だんの日かげで眠っているわけのわからない人たちそれから牛をはこぶ荷車の大きな車の輪それからふるいお城なん千年も前の *y e s* そしてあの男前のムーア人たちみんな白い服をターバンをまいて王さまのようで手前どものちいさな店でおやすみくださいと言って¹⁶

ラルボーの訳文において一見してすぐ目につくのは、コンマやピリオドなどの句読点が一切省かれていることであろう。とはいえ、これはジョイスの原文自体に見られることであり、ラルボーはそれを忠実に写し取っただけとも評せよう。だが、ラルボーの仏語訳はそれにとどまらない、原文の上を行く斬新さを含んでいる。すなわち、そこでは句読点のみならず、通常のフランス語の表記では不可欠のアクセント記号や省略記号(アポストロフ)までもが消去されているのである。

だが、このような斬新な試みの発案者はそもそもジョイス本人であつたらしい。アドリエヌ・モニエはこう回想している。

7月の初め、あらゆる類の困難の張本人であり続けたらしいジョイスが、「ペネロペイア」の断章の翻訳から句読点を削除するだけでなく——それはすでに削除されていた——、さらに文字の上のアクセント記号や省略記号まで削除した方がよかろうと言ってきたのである。ラルボーに手紙を書いて、意見を聞く必要があった。(中略)私は正直なところ反対だった。句読点の削除に対してではなく——それは原文に合致したことだったから——、アクセント記号や省略記号の削除に対してであった。それは論理的なやり方でなく、英語にはこうした記号はもともとないからだった。そんなことをしたらフランス語でもジョイスでもなくなってしまうのだ¹⁷。

だが、彼の意見を徴するモニエの手紙に対し、イタリア滞在中のラルボーから7月6日に届いた電報は、彼女の期待に反し、「ジョイスノイウトオリ¹⁸」であった。「かくして『コ

¹⁶ ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ III』(丸谷オ一・永川玲二・高松雄一訳)、集英社、1997年、561-562頁。

¹⁷ Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon, op., cit.*, p. 161.

¹⁸ Valery Larbaud, *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach 1919-1933, op., cit.*, p. 173.

メルス』創刊号では、そのように事が運ばれ¹⁹、句読点に加えて、アクセント記号や省略記号までも削除されたラルボーの訳文が編み出されたのである²⁰。原作者ジョイスの提案によるものとはいえ、このような訳者ラルボーの訳文は、「ペネロペイア」で展開されるマリアン（モリー）・ブルームの深夜における半醒半睡状態での混沌とした回想を、そのカオスそのままに描出するのに有効であったと評せよう。

ただ、訳語の選択等、細部に関してはやや問題のある箇所も散見される。たとえば、引用した冒頭の箇所で、ラルボーは《le jour ou je lai amene a se declarer》（私が彼に愛の告白をするように仕向けた日）と訳しているが、これは原文の“the day I got him to propose to me”——邦訳では、「あの日あたしは彼に結婚をもうしこませた」となっている——と対比すると不正確である。また、原文の下から2行目の“Moors”（ムーア人）を、ラルボーが、同じく下から2行目で《Arabes》（アラビア人）と訳しているのも誤訳と言える。

また、引用部の中程に、モリーが故郷のジブラルタルで水兵たちが“all birds fly”、“I say stoop”、“washing up dishes”といった遊びをしていたのを思い出すシーンがあるが、これらの遊びに関するラルボーの訳語も正確ではない。まず最初の“all birds fly”だが、これは、「プレーヤーたちは、両手を膝の上に置いて、半円形に座る。彼らの前にリーダーが立ち、彼の補佐役がプレーヤーたちの背後を歩き回る。リーダーがたとえば『カラスが飛ぶ』というように、何かの鳥の名前をあげると、各プレーヤーは両手をバタバタさせるなどして、カラスの飛ぶ真似をしなければならない。続いてリーダーが別の鳥の名前をあげても、手をバタバタさせる動作は続く。ところが突然リーダーが『ネコが飛ぶ』とか『牛が飛ぶ』などと叫ぶと、手は元のままにして動かしてはならない。注意が足りず、こうした変化に対応できないプレーヤーは、リーダーから革ひもで打たれる²¹」というもので、邦訳では「鳥まね」と訳されている。これをラルボーは《chat-perche》——アクセント記号を付した通常の表記では《chat-perché》となる——と訳しているが、これは所謂「高鬼」に類する遊びで、「身体バランスと追いかけてこの遊び²²」であり、原文の“all birds fly”とは別種のものである。

次に“I say stoop”だが、これは、「この命令で全員しゃがむが、“I say”が発話されな

¹⁹ Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon*, op., cit., p. 162.

²⁰ ただし、ラルボーの訳文の1行目の《gâteau》、5行目の《aujourd'hui》、6行目の《ça》にはアクセント記号や省略記号が使われているが、上に述べた事情から判断すれば、これらは校正ミスと考えるべきであろう。

²¹ Don Gifford, *Ulysses annotated*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1988, p. 633.

²² *Trésor de la langue française : dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, tome 1, Éditions du Centre national de la recherche scientifique, Paris, 1977, p. 596.

い時はしゃがんではいけない²³」という遊びである。これをラルボーは«saute-mouton»（馬跳び）と訳しており、これも明らかに誤訳と言ってよかろう。三つ目の“washing up dishes”は、『ユリシーズ』の各種注釈においても不明とされているものだが、ラルボーはこれを直訳的に«laver la vaisselle»（皿を洗う）と訳している。

これらの遊びに関する言葉の訳し方については、ラルボーやモニエ、ビーチらの間で意見交換が行なわれ、ラルボーは児童語や船員用語などを調べたりもしたようなのだが、「おそらくフランス語には存在しない²⁴」と判断した上で、あえて上記のような訳語を充てたものと考えられる。とはいえ、やはりこれらのラルボーの訳語には不満が残る。

4. 終わりに

ここまで見てきた『コメルス』誌への「ペネロペイア」の仏語訳の掲載後も、ラルボーは『ユリシーズ』の翻訳の事業と関わりを持ち続けた。翻訳の作業自体は、1927年以降はジョイスとも交遊のあったスチュアート・ギルバート Stuart Gilbert (1883-1969)²⁵の協力の下に、オーギュスト・モレルが完訳に向けて継続していくことになるのだが、ラルボーは原作者ジョイスとともに監修者として関与し続けたのである。

こうしてラルボーが援助を惜しまなかった仏語訳『ユリシーズ』は1929年2月、ついにその完全な姿を現す。刊行者は、言うまでもなくアドリエヌ・モニエであった。1921年12月に初めて抄訳が朗読されて以来、フランスの多くの文学愛好者たちから待ち望まれてきたこの一大事業は、7年余りの歳月を経てここに成就されたのである。

²³ James Joyce, *Ulysses*, with an introduction and notes by Declan Kibert, Penguin Books, London, 1992, p. 1195.

²⁴ Valery Larbaud, *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach 1919-1933*, op., cit., p. 170.

²⁵ スチュアート・ギルバートは、イギリス生まれで、ジョイスの『ユリシーズ』に関する古典的研究書である *James Joyce's Ulysses* (1930)の著者として名高いが、1925年以降はフランスに住み、ジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963)、アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ Antoine de Saint-Exupéry (1900-44)、ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre (1905-80)、アンドレ・マルロー André Malraux (1910-76)、アルベール・カミュ Albert Camus (1913-60)などのフランス作家たちの作品の翻訳にも携わった。